

## 次世代基盤技術研究所に 期待すること

第二代工業技術研究所長  
廣安 博之



大学の使命は、教育、研究、社会奉仕の3つと思う。ここで言う大学の使命とは、大学の教員の使命で、大学側、いわゆる、近畿大学法人としては、立派な教育、研究が行われる環境を用意することであり、行うのは、教員である。ところがこれまで、工学部では研究所の看板は掲げてきたが、バーチャルな研究所で、実在は無かった。これまで声を大にして、研究所の実現を叫んできたが、かなわなかった。ところが、現、工学部事務部長、工学部長および関係者のご努力で、実現、可能になった。ご同慶の至りである。

立派な高等教育は研究があつてこそ立派な教育が行われると思う。研究が無い教育は、いわゆる中等教育だと思う。中学、高校の教育、大学でも、基礎教育などは、これまでの先人の研究結果を教えればよいが、最先端の高等教育は、教育者の研究成果の上に成り立つ物と思われる。研究の苦しみの中に、立派な教育が生まれる。そういう意味で、研究の苦しみを克服しないと、最先端の高等教育は育たないのでは無いだろうか。

とくに工学部の教育は、学生のその後の進路が、100%近く、日本、世界の工業の発展に何らかの意味で寄与する道を歩むはずであり、そのための一歩を大学で教え始めなければならぬ。

研究というのは、例えば山に登る事と同じであると思う。どの頂上を目指して、どの道を選んで登るのか、高い山に登るのか、低い山でも過去に登った人がいなくて、新しい道を見つければ多くの人に有意義であろう。それらを選ぶのも、登山者、すなわち研究者の選択である。どのような装備が必要なのか、それを得るにはどのくらいの資金が必要なのか。その道はどのような危険性が潜んでいるのか。高い山で、危険性のある険しい道は、グループで登らなければならないだろう。多くの装備が必要であろう。大学における研究もまさに同じと思っている。目的地にたどり着いた時の喜びは計り知れない物がある。

もう一つ、日本の大学の工学部の研究室の経営は、中小企業の工場に似たものと常々思っている。4年生の1年間の卒業研究、修士課程の研究、あるいは博士後期課程の研究は、指導教授の示した、前述の山の頂を目指して、昼夜、時間を忘れて研究を行う。ある時は、沢を駆け巡り、尾根をよじ登る。しかし、最後に到着した頂上を見たときの喜びは、それが途中の尾根でもうれしい物である。

今度出来た「次世代基盤技術研究所」は研究に対しての世界の新しい方向性を示している。この喜びの到達地点を目指して、多くの教員、学生が努力され、新しい人生の歩む道を見つけてほしい。頑張ってください。